新聞資料
12年12月9日

朝日・読売・毎日・日経・道新・タイムス・電気・（　　）朝刊・夕刊

札幌にファミリーハウス運営団体

入院患者の家族 宿泊施設で支援

自宅を離れて長期入院する患者の家族が安く泊まれるファミリーハウス。道内で初めての運営団体「北海道ファミリーハウス」が先月札幌で発足したが、2年前から準備を一手に引き受けてきたのが事務局長の松宮和男さん(66)だ。昔は仕事一筋だったが、「今はボランティアに転職したようなもの」とファミリーハウスの活動に情熱を注いでいる。

事務局長松宮さん 活動PRに情熱

「はい、ファミリーハウスの松宮です」

札幌市中央区のビルの一室にある北海道ファミリーハウスの事務局。松宮さんはほぼ毎日午前か午後の三時間、ここで電話番を務める。机と電話だけがある間借りの事務局だが、「ようやくここまでこぎつけた」と満足そうな表情だ。

松宮さんがこの運動に取り組んだのは、北海道骨髄バンク推進協会のボランティアに加わり一年ほどたった一九九八年秋から。小児がんなど、家族の付き添いが必要な患者と関係が深い同協会が中心になってファミリーハウス設立を目指すことになった。とりわけ熱心だった松宮さんが準備担当者に推された。

同年十一月、設立に向けたシンポジウムを札幌で開催したのをきっかけに「アパートの空き部屋を提供したい」などの善意が相次いだ。松宮さんはそうした部屋を一カ所ずつ訪ねたほか、市内の主な病院を回ってファミリーハウスの活動をPRした。

これまでの松宮さんの奮闘ぶりは、今年三月に松宮さんが泌尿器系の手術のため一カ月半入院したところ、運動が一時休止したほど。こうした苦労が実り、運営組織の設立にこぎ着けた。現在、患者の家族に紹介できるのは北大、札幌医大それぞれの付属病院の近くにあるアパート二カ所だけだが、態勢を整えつつ、紹介できる施設を増やしていく方針だ。

「今はボランティアが仕事」というほど活動に熱心な松宮さんだが、北海道電力で主に営業の仕事をしていた現役時代はまったく経験がなかった。関連会社に出向していた六十一歳の時、体調を崩して退社。その後、外出と言えば近くの山を歩いたり、犬を散歩させるだけの日々だったが、九七年夏に、ある映画を見たことで生活が一変した。

白血病の弟が兄から骨髄移植を受け無事退院するまでを描いた「金色のクジラ」。道骨髄バンク推進協がPRのために開いた上映会だったが、帰り際に電話番号を書いたところ、後日、ボランティアへの参加を誘われた。それからは、知人らに協会の行事への参加チケットを売ったり、骨髄バンクへの登録を求めて飛び回った。ファミリーハウスに取り組んだのも、この活動の延長だ。

プライバシー保護のため、松宮さんもこれまで骨髄移植で治った患者に会ったことがない。ファミリーハウスの活動もアパート所有者らとの交渉が中心で患者の親に会うことはまれ。しかし、活動の手ごたえは確かに感じる。「以前、私がそうであったように、ごく普通の市民がバンクやファミリーハウスの活動に興味を示してくれるのが何よりの勲章だ」と思う。

ボランティアに目覚めた松宮さんの活動はさらに広がった。週に一、二回市内の児童会館などを回っては、特技の手品と折り紙を見せている。目を輝かせる親子を前に松宮さんは、「年を取ってからでもできることがある」と充実した思いをかみしめている。

北海道ファミリーハウスでは、運営にかかわる正会員と寄付のみの賛助会員を募集しており、問い合わせは事務局☎011・242・9151（ファクス兼用）へ。

㊤北海道ファミリーハウスの事務局で電話を取る松宮さん
㊦親子に特技の手品を披露する＝札幌市南区民センター